
Eggキット

空白 紫煙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Eggキット

【Nコード】

N6695M

【作者名】

空白 紫煙

【あらすじ】

ある日、当たり前前に居た子が、当たり前前のように、いなくなつた。

惑う人々に、小さな魔女は、手を差し伸べる。

それは、破滅への道しるべか

救いの唄か

やがて人々は知る

物語の結末を…

キエタコドモたち

或る時代、或る国で、小さくて、それでも当人達にとっては恐ろしい出来事。

さあ、物語が始まるよ。

そう言って、村の長老である老婆が、子供達を見回した。

あれは、婆がまだ十にも満たなかった頃の話じゃ……。

婆は話し始める。

それは、滑稽で残酷で、哀しくて嘲笑の的となるような、そんなお伽噺。

「或る村の……」

*

とある小さな村で、ある日子供が消えた。

誘拐と呼ぶにはあまりに忽然と、家出と呼ぶにはあまりに幼い。

一番村で貧しくて、一番おとなしいその子供の行方を知る者は、誰一人としていなかった。

大人達は噂した。

口減らしだよ。あの親がきつと殺したんだ。

可哀相に、きっともう生きてはいないだろう。

身に憶えのない噂に、ただ貧しい夫婦は惚けるばかり。

それでも、探した。

親が、友達が、隣人が、ひいては村中の人々が。

それでも、子供は見つからない。

いなくなつて、1週間が過ぎた。

それでも、子供は見つからない。

いつの間にか、大人達は諦めてしまった。

それから、一月が経った頃。

いなくなった子供を探していた、その子の友達が行方不明になった。

その子の親は、狂ったように捜した。

その親には、家族はその子しかいなかったから。

それこそ、草の根を分けるように。

目を皿のようにして、昼も夜も朝も次の昼も、子供を探して徘徊した。

まるで幽霊のように歩き回り、狂人のように泣き喚いた。

それに感化されるように、先にいなくなった子供の親も、再び探し始めた。

村中の井戸をさらい、村中の空き家の屋根裏まで搜索し、森に入り、夜明けまで子供を探して走り回った。

それでも、子供達は見つからなかった。

そうしている間に、また子供が消えた。

今度は十余人が一度に。

村の子供の数は、とうとう半分になってしまった。

流石に偶然と呼ぶには、重なりすぎた。

大人達は恐怖した。

子供達はいなくなるのを恐れた大人達によって、家の中に閉じ込められた。

いつの間にか、搜索するものは親のみになってしまった。

誰もが、言い表わせない恐怖に脅かされた。

そのうち、大人までもが消え始めた。

一人、また一人と消えていく。

彼等は探すこともできず、ただ姿の無い恐怖に怯えて暮らしていた。

還ってきた人

ある日、行方不明とされていた一人の少年が、村外れの川で発見された。

ひどく少年は衰弱していたが、生きていた。

村人達は狂喜した。

いなくなった人々は、生きているのかもしれないと、希望を持たから。

落ち着いた少年は、皆に話した。

村外れの川の側、大きな岩の裏側、其処から自分は出てきたと。

不思議な事に、いなくなってから十日の間のこと、何処でどうしていなくなったのかも、少年は一切覚えていなかった。

少年の言葉に疑念を抱きつつも、村人達は唯一の手ががりであるその少年の証言ど通りに、川まで行った。

何ということだ。と、誰かが言った。

大きな岩は、その裏に小さな黒い歪みを隠し持っていた。

まるで空間を割り裂いたかのように、ただただ黒い歪みがあった。

ある村人が言った。

こんなもの、ついこの間まで無かったと。

少年は言った。

確かに自分は此処から出てきたと。

村人達はその黒い歪みに触れてみた。

それには感触は一切なく、温度も気配もなく、ただ腕を入れてみればそれは際限なく腕を呑み込んだ。

顔を入れてみた強者もいたが、真っ暗で何も見えなかった。

やがて、誰もが認めざるを得ない状況になった。

歪みの向こうは、岩ではなく別の空間であるということ。

しかし、ここでまた、彼等は新たな壁にぶつかった。

行方不明の者達が、この歪みの向こう側にいるのは、ほぼ間違いないだろう。

だが、だからどうしようというのだ。
どうすればいいのだ。

村人達は途方に暮れた。

これが自然的なものなのか、人工的なものなのか、それすらわからない。

超然的な存在に、あまりに彼等は無力であり、無知であった。

そんな時、一人が言った。

魔女に聞こう。

と。

村外れの小屋に

昔はどの地域にも、一人は魔女と呼ばれる存在があった。

この村も例外ではない。

村外れの小さな小屋に、魔女は住んでいると、村では噂されていた。

誰も確かめた者はいなかった。

本当にいるのかも、本当に魔女なのかもわからない。

無駄足かもしれないし、行方不明の事件の犯人かもしれない。

それでも、彼等は集った。

魔女以外に足掛かりとなりそうな存在は無かったから。

おそろおそろ、彼等は立つ。

魔女と噂されるものが住む小屋の前に。

すると、まるで全てを見透したかのように、小さな扉が開いた。

驚く村人達の前に、とある影が姿を現した。

いらっしゃい。

少女は笑って言った。扉の中から出てきたのは、十にも満たない小さな女の子だった。

村人は驚いて、言葉を失った。

しかし、いつまでも黙っているわけにはいかない。

一人の男が、意を決して話し掛けた。

君が、魔女かい？

緊張で、少し震えていたかもしれない。

少女が、可笑しそうにわらった。

私じゃないよ。

その返事に、村人達は少しほっとし、少し落胆した。

やはり、魔女はいないか。いたとしても、こんな幼い子供のはずがない。

誰もがそう思った。

肩の荷が降りたように、ほっとした男が、何気なく少女に聞いた。

じゃあ、魔女はいないんだね。

しかし、少女は首を横に振って言った。

ううん、いるよ。私のお姉ちゃんがそつだもの。と。

絶句する彼らを余所に、少女は家の中を振り返る。

お姉ちゃん。

高く、可愛らしい声でそう呼ぶと、中からよく似た声が返ってきた。

お姉ちゃんのこと、呼んでるよ。

すぐに、その、魔女という姉らしき人影が少女の後ろから出てきて、隣に立った。

あらまあ、珍しいわね。

そう言って笑うのは、少女と瓜二つの魔女だった。

おそらく双子だろう。

肩で切り揃えられた髪も、白と黒の色違いの服も、対となっていて、
る。

いらっしやい。魔女に何か用かしら？

からかうように、小さな魔女は言った。

村人は、まだ呆然としたまま言う。

お前が……魔女？と。

すると双子の少女達は、謳うように声をあげた。

そう、私が魔女。

あなたが、魔女。

誰も決めてはいないけれど、誰もが知ってる。

生まれるまえから決まってた。

私が魔女と。

あなたが魔女と。

魔女となるため、私は生まれた。

使い魔となるため、私は生まれた。

私は魔女。

私は使い魔。

呪われた双子。

にっこりと、人形のように笑う二人に、村人達の背筋に寒気が立ち上った。

魔女と名乗った、黒い服の姉。

使い魔と名乗った、白い服の妹。

二人が人外存在であると、今初めて思い知った。

超絶的で、超絶的で、狂人的で、それゆえに、神秘的であった。

魔女は言った。

それで、ご用件は？

村人は、唾を呑み込んで聞いた。

村外れの、歪みは、……貴女がやったのか？

しばし、沈黙が降りた。

村人は皆、まるで怪物を目の前にしたかのように、硬直していた。

魔女は、一度目を閉じ、しばらくして僅かに目を開いて、村人達を見た。

……ええ、私がやりました。

よく通る声で、凜と言う彼女の傍らで、使い魔が目を伏せていた。

な……なんと。

一番の年寄りが、驚愕に目を見開いた。

その途端、まるで堰を切ったかのように、村人達は一斉に魔女を避難した。

老若男女関係なく、ありとあらゆる言葉で責め立てた。

お前がやったのか。

お前が皆を誘拐したのか。

返せ、返せ、返せ、返せ

勢い余ってか、憎悪と悲哀からか、男が一人飛び出した。

そしてそのまま、魔女に殴りかかろうとした。

怒りの籠もった拳が、魔女の小さな頭めがけて振り下ろされる。

誰もが息を呑んだ。

最悪の事態を想像して。

しかし、男の拳は殴りかかる直前に止まった。

妹が、姉を庇うように立っていた。

話を聞いて、まだ途中なの。

そう言って、魔女の隣に下がった。

村人達は、勢いを削がれ、ただ茫然と二人を見た。

魔女の口が、ゆっくり動く。

確かに、あの歪みを創ったのは私よ。

でも、私はそれだけしかしていない。

私は、連れ去られた彼らの、帰り道を創っただけ。

信じて。彼女は絶るように言った。

私は、村人達を連れ去っていないの。

人々は、魔女の必死な様子に嘘はないと思った。

ならば、どうして彼等が行方不明になったのか、知っているか？

ある村人が聞いた。

魔女は暗い表情で頷いた。

知っているわ。誰がやったのか、誰がやらせたのか。

誰が？と村人が聞くと、使い魔が代わりに応えた。

教えられないの。魔術に関わる者は、色々な契約に掎われるから。

その答えを聞いて、村人達は愕然とした。

結局わからずじまいか。

でも、と魔女が続けた。

教えられないけど、ついていってあげる。

魔術を施したものの所に、連れてってあげる。
貴方たちが行くのなら。

どうする？行く？

村人達の応えは一つ。

行く。行つて取り戻す。

その言葉に満足したように、二人は笑った。

なら、行つてあげる。

求めるなら手を貸してあげる。

私達の領域を侵した愚かな術者に、私達の罰を与えなきゃならないしね。

全ての終わりに向けて

ここは…？

あの魔女が創った歪みから、人々は乗り込んだ。

着いた場所は、村人には見覚えのない豪華な建物の一角。

魔女がその言葉に応えた。

王宮よ。

さらりと告げられたその言葉に、一同は硬直した。

何だって！？

わかったのなら、私達はあの魔術を行った者達の所へ行くわ。
どうするの？ 戻るの？

魔女が揶揄するように言う。

行方不明の犯人は、皆わかっていた。

怖じ気づいたなら帰れと、魔女は言うのだ。

しかし

帰らない。戻らない。

私達は、彼らを取り戻したい。

魔女は笑った。

なら、さっさと行きなさい。

そう言って、魔女と使い魔は身を翻した。

村人達は呟いた。

……ありがとう。

駆けていく村人達を横目で見送り、双子はある建物に向き直った。

それは、造りこそ普通ではあったが、何重にも厳重に魔術防御が布かれ、わかる者には驚くほどの強力で堅固な要塞と化していた。

お姉ちゃん。優しいね。

あの人達が危険に合わないように、遠ざけたんでしょ。

違うわよ。これは、私の仕事。

彼等とは関係ないわ。

ツンと少女らしく照れてみせ、魔女は建物を見据えた。

違うよ、お姉ちゃん。

使い魔が魔女の手を取った。

私達の仕事だよ。

さあ、教えてあげよ？お姉ちゃん。

ええ、身のほど知らずな愚か者どもに、古より彼の地を守りし我等のちからを。

そう言つて、二人は同時に笑つた。

魔女と別れた村人達は、王宮中を片っ端から調べていった。

広く、入り組んでいて、捜すのは容易な事ではなかったが、村人達は諦めなかった。

必ずどこかに居るはずだ。

そう信じて、探し続けた。

途中で幾人かの衛兵に出会つた。

しかし、大切な人を探す彼等に迷いはなかった。

力仕事で鍛えられた筋力に適うはずもなく、立ちはだかる衛兵は、剣を構える隙もなく、ことごとく打ち破られた。

その事に罪悪感を感じた者も居たが、覚悟は変わらなかった。

王の住まう宮殿に襲い入る彼等に気付き、捕らえようとする兵達が集まっていく音がする。

村人達は焦つた。

ここで捕まっては、何もできない。

しかしその時、背後で爆音が轟いた。

兵達は、一瞬の驚きの後、そちらに向かった。

村人達は何が何だかわからなかったが、一人が呟いた。

魔女だ。きつとあの二人だ。

おそらく、彼女らの言っていた仕事とやらだろう。

何にせよ、助かった。

警備が薄くなった場所を縫うように進んでいった。

探すうちに、おかしな扉を見つけた。

見張りが立てられ、鍵をつけられた部屋。

まるで捕虜を閉じ込めているような。

此処に違いない。

彼等は見張りを倒し、鍵を壊して中に入った。

勝手な決め付けではあったが、かれらの考えた通りであった。

中には多くの見知った顔があった。

村人達は喜び合い、再会を噛み締めるように、抱き合った。

やがて、興奮が落ち着いてくると、誰からともなく立ち上がった。

さあ、行こう。

全てを始めた者の所へ。

彼の者の願い

人々は動いた。

警備の薄さは、まるで彼等を迎え入れるようであり、不気味でもあった。

それでも、人々は進んだ。

目指すのは、ただ一つ。

奥に進むにつれ、だんだんと豪華になっていく廊下。

そう、目指すのは……

*

さあ、いくわよ。

姉の言葉に妹が頷き、即座に主従関係が結ばれる。

魔女の歌にあわせて、使い魔が踊る。

魔方阵も媒体も生け贄も必要ない。

二人だけの魔法。

血の絆を利用し、全ての根源へ訴えかける。

歌は呪であり、踊りはそれ自体が陣の代わり。

立ちはだかる者は、全て薙ぎ倒す。

仮初めの魔術師など、遠く及ばない。

彼女らは、真の魔術を識っているから。

圧縮された空気を、白い装束を纏った王宮魔術師達に解き放つ。

悲鳴があがる。

魔女が笑う。

使い魔が空気弾の軌道修正をする。

それは、一瞬だった。

命を受けて、この部屋で高度な魔術を繰り返していた百人近くの魔術師が、つい先程乱入してきた幼い二人の少女に壊滅させられた。

爆弾とも呼べる空気弾は、凄まじい音と衝撃を生み出し、一瞬で少女達以外を瓦礫の山で包んでしまった。

ああ、つまらない。

魔女がぼやいた。

この程度の力で、私達に楯突こうなんて、思い上がりも甚だしいわ。

怒りというより、呆れ。

あの人達、行ったね。

ええ。

そして、二人揃って彼等が向かうであろう場所を見上げる。

てつきり怖気付いて帰るのかと思つたわ。

まさか、行方不明の犯人が自分達の王様だった、なんて、思いもしなかったでしょうしね。

見上げたのは、王の間。

彼等が向かう、玉座。

人って、弱いだけじゃないんだね、お姉ちゃん。

そうかもしれないわ。

まあ、何にせよ彼等に幸があらんことを、ってね？

人々は駆け上がる。

初めて見た王宮の豪華絢爛な装飾品に、感動するどころか見向きもせず。

王の間に、護衛に護られた、一人の男がいた。

無礼者め！何者だ。

護衛の一人が声を張る。

あなた方に誘拐された者だ。

王、貴方なんですね？

私達を村から攫い、あの部屋に閉じ込めさせたのは。

問い詰める村人達に対し、気の弱そうな王は悲鳴をあげるばかり。

話など、できる状態ではない。

いったいどうして？

なんのために？

どうやって？

彼等の聞きたいことに、ただ脅えをみせるだけ。

やがて、怒ったかのように話した。

まるで、緊張の糸が切れたかのように。

そうさ、私がやったのだ。

特殊な魔術をかけ、座標を固定し、ある一定の時間に固定した場所を訪れた者を、空間の歪みから移動させた。

なんのために！？

知れたこと。

王は笑う。

神への生け贄だ。今年はお前達の村からだったのだ。

まさか、毎年やっていたの？

誰かが、悲痛な叫びを上げた。

なんてことを。

必要なことだったのだ。

王の返答に、村人達は怒り狂った。

そして、彼等は王を倒し、国中に王の所業を公開した。

…そしてその後、村人達は新たな王を選び、平和な国造りのため

に、大いに役にたったそうじゃ。」

老婆は話し終わると、ふうと息をついた。

「さあ、もうお帰り、子供達。
母さんが家で待つてるよ。」

促すと、おとなしく話を聞いていた子供達が慌ただしく帰りだした。

小さな小屋に一杯に入っていた、小さな聞き手が疎らに帰っているのを見送り、老婆は誰も居なくなつた家で、にっこりと笑つた。

「子供はかわいいね。お姉ちゃん。」

すると、どこからともなく魔女の少女が現れた。

「そうね。あなたの話し方も様になっていたわよ？
私のかわいい使い魔。」

からかうように笑つて、老婆の肩に触れる。

一瞬で、老婆から少女へ変貌した。

「からかわないで、これでも頑張つたんだから。」

「最後は話を変えたでしょう？
優しい子ね。」

「子供に聞かせられる話じゃなかったからね。」

王様が自白する辺りから、変えちゃった。」

「ふふ、そうね。

あんな醜く下劣で哀れな話、聞かされたらたまったものじゃあないわね。」

そして、二人は顔を見合わせて、くすくすと笑った。

歴史にも記されなかった、真実。

知るのは、当人達と、傍観者であつた双子の姉妹のみ。

彼の者の願い（後書き）

ここまで読んでくださった方、本当にありがとうございました。

この話は私が中学生の頃に書いた短い話を伸ばして、まとめあげたものです。

未熟な面が目立ったこととは思いますが、読んでくださる方がいらっしやることに大喜びしています。

ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6695m/>

Eggキット

2011年10月5日23時19分発行